

「ノルウェイの森」の風景

文人の 武蔵野

村上春樹の長編小説「ノルウェイの森」に「武蔵野」という地名が出てくる場面は2か所です。一つは、登場人物の直子の通う女子大の場所をイメージさせる描写の中で、次のように使われています。

「彼女は武蔵野のはずれにある女子大に通っていた。英語の教育で有名なこちんまりとした大学だった。彼女のア

村上春樹 ②⑩

パートの近くにはきれいな用水が流れていて、時々我々はそのあたりを散歩した」

玉川上水を思わせる「きれいな用水」が流れていて「散歩」にふさわしいという場所の設定は、ステレオタイプな「武蔵野」の用法だと言えます。彼女（直子）が住んでいるアパートが国分寺にあることが明記されているのに対して、大学名は曖昧にされています。

また、物語の終わり近く、8年ぶりに東京に出てきたレイコが車窓から眺める対象に

玉川上水に面する女子大の津田塾大（小平市）。「英語の教育で有名」とあることから同大がモデルと考えられている



についても「武蔵野」という語が挿入されています。

「吉祥寺まで行く電車の中で、彼女は窓の外の武蔵野の

風景を珍しそうにじっと眺めていた」とあるように、東京駅から吉祥寺に向かう中央線から見える風景をわざわざ「武蔵野の風景」と呼んでいます。

いずれの「武蔵野」も、ワタナベという主人公の一人称「僕」の語りの中で、「僕」と重要な関係を結ぶ女性とともに主観的に語られています。

ワタナベと直子は神戸出身の幼なじみで、あるとき中央線の車内で再会し、四ツ谷駅で下車して市ヶ谷方面に進み、飯田橋、神保町、お茶の水、本郷、駒込と、地図上の地名を追うように歩きます。「武蔵野のはずれ」とは一線

を画した空間表現です。

直子が自殺した後、レイコとワタナベは東京駅で再会し、ワタナベの住む吉祥寺に向かいます。そこは漠然と「武蔵野の風景」の一部であるようですが、決して武蔵野市ではありません。

曖昧な地名である「武蔵野」がわざわざ使われていることがみてとれるでしょうか。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。